



Theatre & Policy

2016年1月1日
第94号

特定非営利活動法人シアタープランニングネットワーク

NPO法人化から15周年

2015年12月11日、シアタープランニングネットワークは、2000年のNPO法人化から満15周年を迎えました。1998年に活動を始めた時、そして2000年の法人化の折、実のところ、先のことを何も考えていませんでした。ただ考えていたのは、組織を大きく発展させるのではなく、維持できる形で地道に続けていくことだけでした。

俳優トレーニングやドラマ教育のワークショップのために、多くの演出家や指導者を招聘してきました。コーディネーターとして、多くの国際交流や人材育成のプロジェクトに関わらせていただきました。

振り返ってみると、ずいぶん多彩で、ずいぶん生意気で尖ったプロジェクトも実施してきたのだと、他人事のように、不思議に思われます。同時に、多くの方々や助成財団等からのご支援やご協力を頂いてきたことに思い至ります。何一つ私どもだけの力で実施できたわけではないのです。心より感謝いたします。

これからどのような活動を続けていくのか。中長期計画を立てられて当然とお叱りを受けそうですが、あえて計画をしない柔軟性もNPOのような組織には必要なのだと言い訳しながら、求められる活動を、必要性を信じ訴える活動を続けていきたいと思えます。

今後とも、何卒ご支援・ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

代表理事 中山 夏織

TABLE OF CONTENT

- 1 NPO法人化から15周年
- 2 ホスpitalシアタープロジェクト2015
- 4 リラックス・パフォーマンス
- 5 UNESCO 芸術家の地位に関する勧告(1980)―2014 実態調査
- 6 ナショナルシアター物語(13) 英国演劇の分水嶺とナショナルシアター
- 8 Photo Gallery/編集後記



学校と芸術をつなぐ実践ストラテジー2009



ダンディレップ日本ツアー2006



俳優の身体と空間ワークショップ2001



ホスpitalシアタープロジェクト2012



応用ドラマプロジェクト2008



夏休みドラマスクール2013



テアトロ・ヴィッチ日本公演2011

Hospital Theatre Project 2015

妖精の国

~Fairly Land~

ホスピタルシアタープロジェクトは、障がいや病気のために、劇場に赴いて舞台芸術を鑑賞できない子どもたちのために、演劇的体験を届けることにより、美しいものや不思議なものとの出会い、好奇心と想像力を喚起し、社会的・審美的体験をもたらすことを目的とした活動です。

舞台と客席を区切ることなく、じっとしていられない子どもたちが舞台上に飛びこむことも想定し、許容する参加型のパフォーマンスを創造し、障がい児のディサービスや病院、団体等を巡演いたします。

2015年度は、アーツカウンシル東京「芸術文化による社会支援助成」のご支援をいただき、これまで同様の巡演とともに、こども教育宝仙大学の一校舎を会場として、障がいをもつ子どもたち、その家族・介護者、研究者・演劇人を対象とするオープンディを開催いたします。

これまでの活動の経験が私どもに教えたのは、障がいをもつ子どもたちの芸術体験の重要性をさらに喚起するためには、「目に見える活動」にしていく必要性です。

パフォーマンスの鑑賞だけでなく、五感を刺激するような様々なテアトリカルな遊びを子どもたちに提供します。

「妖精の国」を見える存在にするために、多くの想像力と創造性、そして優しさや思いやりを必要としています。

ホスピタルシアタープロジェクト 2015 実施概要

1. 施設・病院等の巡演 (2016年2月後半)
東京都内の障がい児ディサービスや父母の会、病院等を巡演いたします。
無償/公募中。右欄を参照下さい。
2. オープンディの開催
於 こども教育宝仙大学 (東京都中野区)
2016年3月5日 (土) 16:00~
2016年3月6日 (日) 10:30~&13:30~
参加費 子ども 500円/大人 1,000円
*どなたでもご参加できますが、
必ず事前にお申し込み下さい。
2016年1月中旬、申込受付開始予定。

巡演施設・病院等の募集について

飛びだしても、踊りだしても大丈夫。誰にも気兼ねすることなく楽しめる参加型のパフォーマンスです。
舞台や特別な施設などは必要ありません。
フラットなスペースと着替えの部屋があれば十分です。

巡演可能期間 2016年2月17日~28日

上演時間 30分 (予定)

申込方法等、詳細は、HPをご覧ください。

<http://www.5a.biglobe.ne.jp/~tpn/htp2015-shisetsu.htm>

アーティスト募集

このプロジェクトの主旨に賛同し、参加する俳優、舞踊家、音楽家、ストーリーテラー等を募集しています (フィジカルシアター、ダンス、楽器のできる方大歓迎)。ワークショップ型のリハーサルで、それぞれの専門性を活かしながら、4名編成の巡演作品を創造するとともに、オープンディの準備を進めていきます。

募集人員 10名 (参加費なし)

出演料 出演日数に応じて報酬をお支払いします。

申込方法、詳細は、HPをご覧ください。

<http://www.5a.biglobe.ne.jp/~tpn/htp2015-artists.htm>



ARTS COUNCIL TOKYO

ご支援のお願い

アーツカウンシル東京<芸術文化による社会支援助成>のご支援を得て、2015年度のホスピタルシアタープロジェクトが可能になりました。しかし、公的助成という性質から数多くの助成対象とならない経費が存在します。子どもたちが安全に快適に遊ぶための物理的配慮や、多くのボランティアを必要とするため、さらなる資金調達が必要となっています。日頃、劇場に足を運ばない子どもたちに演劇を届けるプロジェクトに、また、それを目に見える形にするためのプロジェクトに、そして、一人ひとりに寄り添いながら、より深い体験をプロジェクトに対しての、皆様の心からのご支援をお願いいたします。

★ご寄付の方法について★

摘要欄に「TPNファンド」とご記載のうえ、郵便振替口座へご送金くださいませ。

郵便振替口座：00190-0-191663 1口 3,000円

リラックス・パフォーマンス

私たちはすべての子どもが芸術を楽しみ、芸術により刺激を得る機会を持つべきであると信じています。しかし、残念ながら、多くの自閉症の子どもたちがアクセスに対し、不公平なバリアと直面しています。このプロジェクトは、子どもたちや若い人々を劇場が歓迎して受け入れ、インクルーシブにすることです。私たちはすでに解説放送、字幕、手話つき公演を通して障害を持つ人々をケアしてきました。リラックス・パフォーマンスもあってもいいのではないのでしょうか？

Jeremy Newton, The Prince's Foundation for Children and the Arts

英国の多くの劇場で—非営利公的助成／商業主義の枠を超えて—急速に広がりを見せているのが、「リラックス・パフォーマンス(relaxed performance)」の取り組みである。学習障がいをもつ子どもや若い人々、その家族に—彼らに特化して創造された作品ではなく—メインストリーム、いわゆる普通の人々が観に行く作品にアクセスできるようにする実践である。通常の公演日程のなかで、1回から数回の公演を、特別に「リラックス・パフォーマンス」と銘打って、広報し、販売し、上演を実施する。チャリティではなく、きちんとしたビジネスとしてである。

ただ、違うのは、チケットの購入者に対して、担当者（たいていはエデュケーション部のメンバー）は一人ひとりに電話等で連絡をとり、障がいの種類や程度、どのようなサポートが必要なのかを確認する作業が行われる。事前の詳細な資料も送付する—多くの人々にとって、はじめての劇場体験なのである。

最も困難なことだと想定されることは、担当者は台本を熟読し、ときに稽古にも立ち会いながら、激しい光の点滅や衝撃音等、障がいを持つ人々には適さないものを、丹念に洗い、調整を求めるという作業である。もちろん、完全なる暗転は排除される。児童青少年演劇ではこのあたりは慣れ親しんでいるところだが、メインストリームでは、暗転が当然、非常灯も消すのが普通という実践へのチャレンジでもある。客席の配置・アレンジメントも（自由に歩き回れるように、あるいは車椅子に対応するように）変えられる。すべてが芸術監督やデザイナー、テクニカル・スタッフの理解なしには、なしえない作業である。

出演者にも契約の際に、リラックス・パフォーマンスも含まれることが伝えられ、それに対応することが求められる—終演後にコミュニケーションの時間がとられたりもする。

また、舞台に飛びだす懸念に対しては、開演前に舞台の上にあげ、装置に触らせてあげるという措置もとられる。表方のスタッフは、事前に、障がいについて学び、その介護・ケアのトレーニングを受ける。一般と同じ演

目であるため、ときに上演時間は2時間半を超える。そのため、一時避難の場所をも用意しておく…。つまり、劇場は、あらゆる事態に対応すべく、全身体制、準備万端で受け入れるのである。

リラックス・パフォーマンスという名称を初めて使ったのは、リーズの地域劇場ウエストヨークシャー・プレイハウスである。2009年に着手した。ロンドンの児童青少年専門劇場ユニコーンシアターは、2010年から「自閉症フレンドリー・パフォーマンス」として実施してきた。

しかし、急激な広がりのおかげとなったのは、2012年11月から2013年6月までの8か月のあいだに、自閉症の人々を支援するナンシー・ルリー・マークス・ファミリー財団の財政支援により、ウエストエンド商業演劇の業界団体SOLT(Society of London Theatre)、地域劇場の業界団体TMA(Theatrical Management Association)、子どもにとっての芸術活動を支援するプリンスズ財団のパートナーシップにより、英国全土の8つの劇場で実験的な試みが行われたことである。ウエストエンドの『ライオンキング』や、シェークスピア・グローブ座の『ロミオとジュリエット』、地域劇場での『レイルウェイ・チルドレン』等に、4,893名が観劇した。

観客の多くは、自閉症のみならず、アスペルガー、知覚やコミュニケーション障がいがあるという理由で、「劇場で観劇する」という、ごく普通であるはずのファミリー・イベントから疎外されてきた家族たちである（とりわけ、英国人にとって、クリスマスのパントマイムの観劇は家族の一大行事である）。誰に気兼ねすることなく、観劇することの喜びは計り知れない。

その喜びは、出演者にもスタッフにも分かち合われる。そのプロセスの中で、劇場は単なる掛け声だけの「社会包摂」を超えて、コミュニティの一員に変化していく。むしろ劇場がコミュニティに包摂される。そんな劇場が生まれて来る可能性がここにある。

ユネスコ芸術家の地位に関する勧告(1980)

2014 実態調査

1980年、ユネスコは「芸術家の地位に関する勧告」を採択し、加盟国に芸術家の職業的、社会的、経済的地位の向上を求め、その達成のためのトレーニング、社会保障、雇用、収入、税制、流動性、表現の自由等にかかる政策ならびに措置を求めた。この勧告は、要約すると、次の二つの達成である。

1. 個々の社会において芸術家が果たす重要な役割を認識すること。
2. 芸術家のユニークな環境と彼らが働く通常ではないあり方に呼応した適切な措置を発展させることによって、職業芸術家の創造的表現を奨励し、公平な措置を拡充すること。

2014年、ユネスコは1980年の勧告がいかに加盟国で反映されているか、とりわけ現代的な次の4項目に着眼して実態調査を行った。

1. デジタルテクノロジーとインターネット（著作権等）
2. 芸術家の国家間移動（ビザや税制）
3. 社会的保護（社会保障）
4. 芸術表現の自由

60カ国と55民間団体（労働組合等）がそれに対し回答を寄せ、2015年10月、その分析結果が発表された。

調査に応じた国のうち、47カ国（87%）が、ユネスコ勧告を「政策の進展のうえでのレファレンス」と見なす（みなしてきた）と答え、31カ国（66%）は「政策の議論の発展させるためのツール」である（あり続けてきた）と回答した。

しかし、分析結果の報告書が指摘するのは、1980年の勧告が時代遅れのものではなく、いまでも重要な位置づけを持つとしながらも、各国、各省庁、また分野により、芸術家そのものの定義（美術家だけを芸術家と見なす国もある）、仕事のあり方に対する認識が異なることから生じるズレである。また、個人で創造活動を行うものと、団体として活動するものもある。オファーされての仕事と、自分自身のイニシアティブの差異はどう考えるのか。また、どの省庁の誰が回答を寄せたかで、結果は大きく変化してしまう。矛盾も少なくない。縦割り行政の弊害である。例えば、芸術文化施策を語るレポートは、その政策が芸術家にいかな

る社会的、経済的な影響を与えるかは顧みない。芸術家がある中心にあるとは考えられていないからだ。また、行政の語る芸術表現の自由は確かに守られているという言葉に異論をはさむ芸術家もあるだろう（ちなみに、日本は芸術表現の自由については、ベスト・プラクティスの国のひとつに数えられている…）。だからこそ、報告書は労働組合といった業界団体とのさらなる連携を求めるのだが、容易ではない。労働組合自体が許容されていない場合が少なくないからだ。

少数ながらも、勧告を受けて、芸術家の法的な地位を位置づけた国々がある。カナダのケベック州や、ブルキナファソ、モロッコ等である。自営芸術家を、文化省のもとに登録させる制度を採用した、クロアチア、スロベニア、トーゴ等もある。ブラジルの場合、登録した芸術家でなければ、公的施設で上演することはできないという。コスタリカには芸術家を支援するためのいくつもの法律が用意された。ある意味、「パブリック・サーバント」として芸術家が守られているわけである。

なかでも、ベスト・プラクティスとして紹介されているのは、モロッコである。2003年に施行された芸術家の地位にかかる法律は、実演家を労働法と社会的保護の見地から被雇用者としてみなすべく、エージェントの仕事と手数料を規定し、マイナーな仕事をも保護し、芸術家の威厳と社会にとっての重要性を謳うものになっている。

一方、スペインを例として「質も、組合等の加盟の有無も含めて、芸術家のための枠組みが一切ない」ことが報告されている一どこか日本と似ている。誰もが芸術家として活動できることは芸術表現の自由だが、同時に、何ら保護をうけられないことを意味する。

この分析結果の読みながら、著作権の保護は、芸術家の人権の言説として語られていることに気づいた。著作権ビジネスとして、とかく産業保護・育成ばかりが強調されがちだが、その本質には人権が存在するのである。この意味においても、勧告が存在していることをどれだけの国民が、芸術家が認識しているのだろうか。芸術家自身の意識の向上が、まずは求められているように思われてくる。

（報告書：英文）

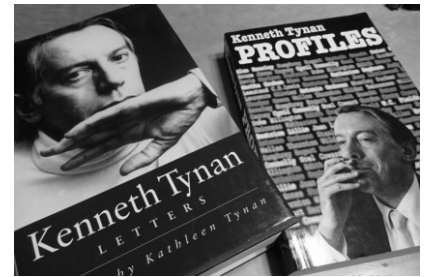
<http://en.unesco.org/creativity/file/analytic-report-neilsept2015pdf>

ナショナルシアター物語 (13)

英国演劇の分水嶺とナショナルシアター

中山 夏織

連載



ナショナルシアターの覇権をめざして、オリヴィエらをオールドヴィックから追いやったエッシャー卿だが、少し急ぎ過ぎた。1951年に「礎石」が敷かれながらも、1955年になっても、ナショナルシアターは誕生しうる状態にはなかった。全国紙ガーディアンは「何も起こらなかったし、起こりそうにもない」という記事を掲載していた。政府の一部では、娯楽税のうちの1%をナショナルシアター建設に活用するという案も出たが、政府としては娯楽税撤廃の方が重要課題だった。

1956年5月、アクター・マネジャーで、シェークスピア俳優として活躍したドナルド・ウォルフイットが、オックスフォード大学演劇ソサエティで、ナショナルシアターの必要性を訴えた。

「この国には目下、若い人たちが我が国の偉大なる古典作品のレパートリーを見る劇場がないのであります。…私は若い世代のために憂えているのであります。」

この時期、新たなメディア—商業テレビ放送が始まっていた。英国芸術評議会は、国内の地域の劇場の閉鎖を憂えた。しかし、一方で、英国演劇は分水嶺を迎えていた。ジョージ・ディヴィーン率いるロイヤルコートの幕開けと「怒れる若者たち」の到来。ロンドンの東では、ジョン・リトルウッドのシアターワークショップの活動。また、コベントリー市は空襲により破壊された町の再生計画の目玉として公立劇場の建設を謳った—ベルグレードシアターである。若者たちも、社会も変化していた。アクター・マネジャーであり、商業演劇のビジネスに働くウォルフイットはすでに「古い演劇」のシンボルのひとつでしかなかった。ウエストエンドは時代遅れの存在になっていた。

若者たちのシンボリックな存在が、ケネス・タイナンである。1948年にオックスフォード大学を卒業し、1954年、全国紙オブザーバーで演劇批評を担当し、そのキレキレの筆先に急速に人気が高まった。

ケネス・タイナンという人物の存在が、ナショナルシアターの草創期に大きな役割を果たすことになるのだが、少しばかり彼の生い立ちを覗いてみよう。というのは、生い立ちそのものが彼の人生とナショナルに大きな影響をもたらしたと思われるからだ。

バーミンガムで、1927年4月生まれ彼の出生届には、父ピーター・タイナン、職業（生地屋）と記載されていたが、偽りだった。実は、父親は成功したビジネスマンで、何度も近隣都市の市長を務めた名士サー・ピーター・ピーコックで、母親はシングルマザーとしてタイナンを生んだ。本妻とのあいだに5人の子どもを抱えていたピーコックは、タイナンと母ロージーを守るために、巧みに名前を使い分ける二重生活を続けた。出生の秘密は、実に、1948年の父の死まで隠され続けた。

子どもの頃から傑出した知性と好奇心を示し、6歳で日記をつけ始めた。その日記には、母親の料理の詳細な描写や、父親のジョーク、自分が見た映画に対するコメント等が溢れた。そんな早熟な息子に、両親は惜しみなく本や雑誌を買うお金を、週に何度も映画を見るお金を与えた。戦時中、近隣の人々の多くが巻き込まれる地雷の爆発にも遭遇したこともそれなりに影響したか、次第にエキセントリックな考え方をもつようになった。

戦争が終わると、奨学金を得て、オックスフォード大学に進学した。すぐに美貌と派手なでたちと振舞い、そして俳優、演出家、批評家として参画した大学演劇においても、その過激な言動で、周囲を驚かせる存在になった。一方で、真摯な学生であり、指導教官であったC.S.ルイスに対して、生涯にわたる尊敬を抱き続けた。その言動から、ときに同窓の先輩オスカー・ワイルドと比較されるタイナンだが、ゲイではなく、多くのガールフレンドに囲まれての学生生活だった。21歳の誕生日は、テムズ河にボートを浮かべ、100人以上の友とともに祝った。実に、派手好きなのである。しかし、一方で、大学の卒業直前、自らの出生の秘密を知ることになる。これがタイナンにバーミンガムの記憶を封印させることになった。

1950年代、タイナンの筆は冴えに冴えた。痛烈な批評が著名な俳優や演出家を怒らせた。ローレンス・オリヴィエも決して許さないと誓うほど、そのプライドを傷つけられた。それでも読ませる魅力を兼ね備えていたというから凄い。一度は批評家たちが「葬ってしまえ」とばかりに糾弾した『怒りを込め振り返れ』を擁護したのも彼である。ウエストエンドの「外側」で、より文学的でより知的な演劇への欲求をリードした。オリヴィエに対しても旧時代の遺物と攻撃しながらも、タイナンは公的助成によるナショナルシアターの必要性は認めていた—タイナンと呼応するのが、彼より3歳年下のピー

ター・ホールである。

そのタイナンと、批評・歴史家リチャード・フィンドレーターが 1956 年、ナショナルシアター運動を担う委員会 SMNT が、いわゆる”Established”—高齢の貴族階級とその世襲貴族、高齢の演劇人ばかりで構成されていることへの憤りから、とんでもない行為に出た。ナショナルシアターの礎石を墓標に見立て、葬式を行ったのである。そして、年寄りばかりの委員会を否定し、タイロン・ガースリーにナショナルシアターの芸術監督になるように求めた—といっても、ガースリーもまた年寄り世代に位置したのだが。賢明なるガースリーはその任を負いはしなうと言明しながらも、ナショナルには若い血が必要だと訴え、さらに、オールドヴィック以外の劇場がナショナルだと信じられるものではないと主張した。

年寄り世代と、若い世代をつなぎうる唯一の人物—それが、ローレンス・オリヴィエだった。オールドヴィックを去った後、1950年代のオリヴィエは、どこか停滞状態にあった。映画俳優としての成功は収めながらも、自身のカンパニーはウエストエンドで多額の金を失くしていた。一方で、ストラッドフォードでのピーター・ブルック演出の『タイタス・アンドロニカス』は大成功を収めていた。オリヴィエの心中は、何か枯渇感のように新しいものを求めていた。

1956年、ロイヤルコートで、オリヴィエは『怒りを込めて振り返れ』を観た。それをひどく嫌ったが、ディヴィーンは巧みにオリヴィエを懐柔し、もう一度観劇させた。二度目の観劇でオリヴィエが直観したのは、オズボーンなら社会の神経に触れるダイアログが書けるだろうことである。次の戯曲を送るようにオズボーンに伝え、オズボーンはオリヴィエに『エンターテイナー』を書いた。1957年、初演の『エンターテイナー』は、ロンドンでの成功の後、ニューヨークで上演、映画化もされた。オリヴィエは、英国演劇のニューウェーブに参加した最初の Established スター俳優となった。この後も、オリヴィエはイヨネスコの『犀』等、アヴァンギャル的な作品に魅せられ続けることになる。

このある種の放浪が、オリヴィエこそが、ナショナルシアターの芸術監督に適任者であるという確信を周囲に抱かせることになった。当代一のスターであり権威的存在でありながら、ブルック、ホール、ディヴィーン、ウィリアム・ガスキル、ジョン・デクスターという新しい世代の演出家たちと協働できる存在…。政治家を喜ばせ、官僚と闘い、無意味な委員会に忍耐をもって出席し続けられる人材…（言い換えれば、忍耐強い、慎重居士ということである）。

1957年、非公式に、オリヴィエ・リテルトンは、オリヴィエにナショナルシアターの初代芸術監督となる気はないかと打診した。オリヴィエは思った。「自分はその任に最適な人間ではないが、おそらく唯一の人材なのだ

ろう」。その翌年、オリヴィエは、ナショナルシアターの理事会の一員に加わる。

オリヴィエの理事会参加はそれなりの勢いを取り戻させたものの、政府は劇場建設のための資金を提供できないでいた。そんな折の 1960 年、コッテスロー卿が英国芸術評議会の議長に就任した。芸術への造詣も深く、1957 年からはオールドヴィックとサドラーズ・ウエルズの「箱」のガバナーに就任していた。大蔵省からコッテスロー卿への諮問は、サウスバンクに劇場が所定の予算内で建てられるか（べきか）。コッテスロー卿は熱意をこめてナショナル建設を訴えた。しかし、その予算は大きく膨らみ過ぎていた。政治はシンプルなものではない。議論は様々な思惑で繰り返された。1961 年 3 月、政府は「国家はナショナルシアター建設のための資金を拠出できない」旨を発表した。そして、「芸術評議会の資金は、地域劇場を助けるために増額されるであろう」。

ここで言われる地域劇場には、オールドヴィックも、ピーター・ホール率いるロイヤル・シェークスピア・カンパニーも含まれた—ホールが王勅を獲得したのは、この政府発表の前日のことだった。

ナショナルシアターへの思いのひとつに、当時の英国に欠いた「オープン・ステージ」「スラスト・ステージ」の形態をもつ劇場への憧憬があった。「オープン・ステージ」をもつそれなりの規模の劇場が初めて、1962 年、チチェスターに建設された。「チチェスター・フェスティバル・シアター」—この劇場が、未来のナショナルシアターの芸術監督のために二つの提案をもちかけた。ひとつは慣れない劇場形態のもとで仕事をするチャンスであり、もうひとつはナショナル的レパートリーを上演する地域劇団を作ってみないか？

チチェスターが「初代の芸術監督にローレンス・オリヴィエが就任する」旨の報道発表を行ったのは、実のところ、政府の資金拠出の拒絶の 1 週間間前のことだった。確かな筋からのリークもあったのだろう、政府の拒絶が、引き金となって方向性のシフトをもたらした。オリヴィエはユニオン・ジャックを背負う仕事の「ドレス・リハーサル」に向かっていく。

その裏側でも政府とロンドン自治体、ストラッドフォード、オールドヴィック入り混じっての駆け引きは続いた。RSC は正式にナショナルシアター委員会から離脱し、独自の道を歩むことを選択した。

1962 年 8 月、オリヴィエのナショナルシアター芸術監督の就任が公に公表された。その 2 週間足らずうちに、オリヴィエはタイナンからの仕事を求める手紙を受け取った。（次号へ続く）



ジェームス・ブライニング「日本劇団協議会」2002



マックス・スタッフォード・クラーク「俳優座劇場」2004



ヴォジミェシュ・スタニェフスキ 2006



ドミニク・クック「文学座アトリエ」2010

特定非営利活動法人
シアタープランニングネットワーク

〒182-0003 東京都調布市若葉町 1-33-43-202

Phone & Fax 03-5384-8715

Mail tpn1@msb.biglobe.ne.jp

Web <http://www5a.biglobe.ne.jp/~tpn>

◇編集後記◇

15周年だからといって特別なことは考えていませんでしたが、本号を編集しながら、懐かしい画像をたぐっていくうちに、画像一杯の特集号になってしまいました。もちろん、本号で掲載できたのは、ほんの一部。画像自体が行方不明になっていたり（！）、ブレがあったり鮮明でなかったり等、残念ながら掲載を断念せざるを得なかった多くのプロジェクトの画像もあります。私どものささやかな15年の歩みの一端を分かちあって（思いだして）いただければ幸いです。ちなみに、左の写真は、演出家特集です。

改めて思うのは、なんて素敵な仕事に携わらせていただいたのだろうということ。この仕事を通して、私が出会い続けてきたのは、「演劇」というフィールドで、困難につねに新たな地平を切り開き続けるパワフルな創造性をもつ人々です。真摯な学ぶ姿勢、演劇への思いがたまらなく熱い人々。一人ひとりとの出会いを感謝し、その経験をこれからの仕事にも活かしていきたいと願っています。

ところで、不思議なことに、2014年の秋頃から、ほぼ毎月のように私どもで招聘したりしたわけではないのに、長年のおつきあいの海外の方々が続々来日し、ご一緒する機会に恵まれました。15周年を祝って下さったと勝手に解釈しています。

本号がお届けできるのは、2016年1月。寄る歳なみもあるのですが、この1年はとても早く感じられました。とりわけ『応用ドラマ』の翻訳・出版、そして大東文化大学での新たな講座の準備に追いまくられた感もあります。勉強不足を思い知らされ、反省しきり。「なんだ、わかってないんじゃないか」。心が勉強しろ、勉強したいと申しております。

ともあれ、2015年、そして、これまでの15年間のご愛顧、ありがとうございました。

2016年も何卒よろしくお願ひ申し上げます。

私どもは、子どもたちのための「妖精の国」の扉を開ける準備に突入していきます。

(中山夏織)



特定非営利活動法人

シアタープランニングネットワーク (TPN)

舞台芸術関連の様々な職業のためのセミナーやワークショップをはじめ、調査研究、情報サービス、コンサルティングなど、舞台芸術にかかるインフラストラクチャー確立をめざすヒューマン・ネットワークです。国際的な視野から、舞台芸術と社会との関係性の強化、舞台芸術関連職業のトレーニングの理念構築とその具現化、文化政策・アートマネジメントにかかる情報の共有化、そしてメインストリーム・シアターとコミュニティ・シアターの相互リンケージを目的としています。2000年12月6日、東京都よりNPO法人として認証され、12月11日、正式に設立されました。

theatre & policy シアター&ポリシー

TPNの基幹事業として、2000年6月から定期発行(隔月間・年6回)しています。定期購読(準会員)をご希望の方は、左記のTPNファンドの郵便振替口座の摘要欄に「定期購読希望」と記載し、年会費3,000円をご送金ください。

発行・編集人 中山 夏織